

共同体感覚認知尺度の作成

橋口 誠志郎

東京大学大学院教育学研究科

Development of a Social Interest Cognition Scale

Hashiguchi Seishiro

The Graduate School of Education, the University of Tokyo

キーワード：共同体感覚 他者への関心 貢献への決心

抄録：共同体感覚の認知的側面を測定する尺度が存在しなかったため共同体感覚認知尺度を作成することを目的とした。調査協力者はA大学, B大学, そしてC大学の学部生140名(男性68名, 女性72名)であった。使用した尺度は共同体感覚認知尺度暫定版, 青年版共同体感覚尺度, 主観的幸福感尺度であった。大学生用共同体感覚認知尺度暫定項目20項目に対して探索的因子分析を行ったところ2因子が抽出された。第1因子は“貢献への決心”(5項目, $\alpha = .91$), 第2因子は“他者への関心”(5項目, $\alpha = .86$)であった。また“貢献への決心”尺度得点は“自己受容”尺度得点を除く全ての尺度得点と有意な正の相関を示した。一方“他者への関心”尺度得点は, “自己受容”尺度得点と“主観的幸福感”尺度得点を除く全ての尺度得点と有意な正の相関を示した。信頼性と一定の妥当性を備えた共同体感覚認知尺度が作成された。

問題と目的

共同体感覚 (Social Interest) はAdlerのIndividual Psychology (Adler心理学) の中心概念である (Ansbacher et al., 1956)。また共同体感覚は精神的健康のバロメーターであり (岩井, 2011), 共同体感覚を育成することは教育やカウンセリングの目標ともされている (会沢, 2009)。

Adlerは共同体感覚について「他者の目で見えること, 他者の耳で聞こえること, 他者の心で感じること, がさしあたって許容することができる, いわゆる共同体感覚というものの定義である, と私には思える」と述べている (Ansbacher et al., 1956)。また「共同体感覚が発達した人は『私は他者に何を与えることができるか』という問いを胸に秘めつつ生きている」とも述べている (Adler, 1927/高尾訳1987)。様々に定義されてきた共同体感覚であるが, Adler自身が共同体感覚を様々に表現したため共同体感覚の定義の確定はAdler以降も難航している (野田,

1987)。しかしながら、1970年代に入り国外において共同体感覚を測定する尺度が作成されるようになった。主に使用されている尺度としては以下の3つがある(高坂, 2011)。

第1に共同体感覚を「4つのライフタスクの各領域において貢献と協力を厭わないこと」と定義して作成されたSocial Interest Indexがある(Greever et al., 1973; 以下SIIと略記する)。この尺度は交友(8項目), 自己重要性(8項目), 愛(8項目), 仕事(8項目)の4つの下位尺度(計32項目)から構成されている5件法で回答する尺度である。

第2に共同体感覚を具体的には定義せずSullimanとAdler派のセラピストたちとで項目案を作成して開発されたSulliman Scale of Social Interestがある(Sulliman, 1973; 以下SSSIと略記する)。この尺度は50項目で構成されている2件法で回答する尺度である。また他者への関心と信頼(3項目), 自己への自信と世界に対する楽観(4項目)の2つの下位尺度から構成されている。

第3に共同体感覚を具体的には定義はしていないものの項目作成時に「他者の関心または他者の心身の健康に対する関心」を測定するという観点から開発されたSocial Interest Scale(Crandall, 1975; 以下SISと略記する)がある。この尺度は24組の性格特性のペア(実際に得点化するものは15項目)から一対比較法で回答する尺度である。

一方、国内においては2010年代になり我が国独自の観点による3つの尺度が開発された。第1は高坂(2011)による青年版共同体感覚尺度である。この尺度は「私は共同体の一員だ」「共同体は私のために役に立ってくれるんだ」という感覚である「所属感・信頼感」(10項目), 「私は私のことが好きだ」という「自己受容」(6項目), 「私は共同体のために役に立つことができる」という感覚である「貢献感」(6項目)の計22項目, 3つの下位尺度から構成されている。

第2は服部ら(2012)による成人版共同体感覚尺度である。この尺度は共同体感覚を具体的には定義はしていないが, ライフタスク(愛)(12項目), ライフタスク(交友)(13項目), ライフタスク(仕事)(9項目)の計34項目, 3つの下位尺度から構成されている。

第3は共同体感覚を「私は他者に対して建設的な働きかけをすることができる, 他者は私に対して建設的な働きかけをしてくれるという信念」と定義し, 前者を共同体感覚的自己スキーマ(5項目), 後者を共同体感覚的他者スキーマ(5項目)とする橋口(2012)による小学校(中・高学年)用共同体感覚尺度である。この尺度は計10項目, 2下位因子で構成されている。しかしながら, 前述した諸尺度は, 「感覚」または「信念」を測定しており, 「認知」的な側面を測定することに特化していないという問題がある。

Adlerは後に共同体感覚をsocial interestと英訳している(Ansbacher et al., 195), 前述したようにAdler自身が描写した共同体感覚には認知的側面が存在していると推測される。また, 認知はその人が創り, あるいは選びとったものなので本当は変更可能であると考えるのがAdler心理学である(深沢, 2015)。このことを踏まえると, 「認知」という変更可能な側面に焦点をあてた共同体感覚認知尺度が開発することは, 具体的かつポイントを絞った介入が可能になり, 臨床, 教育両面へ寄与が期待され意義があると考えられる。そこで本研究では, 認知的側面に焦点をあてた尺度を作成することを目的とする。

本研究の仮説は以下の3つである。共同体感覚認知尺度は「感覚」を測定している青年版共同

体感覚尺度(高坂, 2011)と測定している側面は異なるが、関連はあると推測される。このことをふまえると正の関連を示すことが予測される。そこで仮説1は共同体感覚認知は青年版共同体感覚と正の関連を示す、である。次に向後(2014)は共同体感覚は幸福感につながると指摘している。このことをふまえると仮説2は共同体感覚認知は主観的幸福感と正の関連を示す、である。最後にAdler心理学はポジティブ心理学と関連があることが指摘されている(向後, 2015)。またポジティブ心理学ではポジティブ感情は幸せの要素のひとつである(Seligman, 2011/宇野訳, 2014)、これらをふまえると仮説3は共同体感覚認知は肯定的気分と正の関連を示す、である。

方法

調査協力者 A大学, B大学, C大学の3つの大学の学部生145名に調査を実施した。そのうち無効回答であった5名を除き有効回答者は140名であった(男性68名, 女性72名;平均年齢19.88歳, 標準偏差2.70)。松尾ら(2002)と繁樹ら(1999)は因子分析に必要な標本は項目の5倍から10倍であると指摘している。本研究の標本数140は共同体感覚認知尺度暫定版20項目の約7倍に相当する。そのため必要な標本数を満たしておりかつ3校から得たデータであるため一般性はある程度確保できていると考えられるため分析可能であると判断した。

調査時期 2014年10月から2014年11月であった。

倫理的配慮 調査は講義時間内に担当講師が調査票を配布し集団実施した。そのさいフェイスシートには調査への参加は自由意思であること, 参加しなくても不利益は被らないこと, 講義の成績とは関係ないこと, 回答を講師が閲覧することはないこと, 氏名は記入する必要はないこと, 回答したくない項目は回答しなくてもよいこと, 回答の途中で中止することもできるを記した。また調査開始前に同様の内容を担当講師が口頭でも伝えた。

調査内容 以下の4つの尺度を用いた。

1. 共同体感覚 ① 本研究においては、野田(2005)の共同体感覚の定義「他者への関心と貢献への決心」を踏まえて共同体感覚を「他者に関心を持ち他者へ貢献しようとする」と定義した。この定義を踏まえた項目を作成し、共同体感覚認知尺度暫定版を作成した。暫定版においては、定義を踏まえ、「他者への関心」と「貢献への決心」の2つの下位尺度を想定した。項目は定義をふまえながら独自に作成し、「他者への関心」10項目、「貢献への決心」10項目の計20項目で構成した。教示は小堀ら(2004)を参考に、「みなさんの頭に浮かぶ考えの例が以下に挙げてあります。それぞれの考えを読んで、ここ1週間の間に、その考えを、どのくらいの頻度で考えたかを、あてはまる数字に1つ○をつけてください。」とした。回答方法は、いつもあった(4点)、よくあった(3点)、ときどきあった(2点)、全くなかった(1点)の4件法であった。得点が高いほど共同体感覚が高いことを示す。

2. 共同体感覚 ② 青年版共同体感覚尺度(高坂, 2011)を用いた。「所属感・信頼感」10項目(項目例:自分が今いるグループや集団の一員であることを実感している, 全体的に他人を信じることができている), 「自己受容」6項目(項目例:今の自分に満足している), 「貢献感」6項目(項

目例：進んで人の役に立つことができている) の計22項目で構成される。得点が高いほど共同体感覚が高いことを表す。

3. **主観的幸福感** 日本版主観的幸福感尺度(島井ら, 2004)を用いた。4項目で構成される(項目例：全般的にみて、わたしは自分のことを() であると考えている。括弧内は“非常に不幸な人間” から“非常に幸福な人間”)。得点が高いほど主観的幸福感が高いことを表す。

4. **肯定的気分** Depression and Anxiety Mood Scale (福井, 2002) の下位尺度である“肯定的気分” 尺度を用いた。3項目で構成される(項目例：楽しい)。得点が高いほど肯定的気分が高いことを示す。

結果

因子構造 共同体感覚認知尺度の因子構造を検証するために暫定版20項目に対して最尤法にて探索的因子分析を行った。スクリープロットの落差から2因子が妥当であると判断した。次に2因子を指定し最尤法, プロマックス回転を施し, 再度因子分析を行った。片方の因子に.20以上の負荷をした項目が存在したため, それらの項目を除外した上で, さらに因子分析を行った。その結果, 想定した2因子が抽出された。第1因子は5項目が全て“貢献への決心”を反映した項目で構成されていたため“貢献への決心”因子と命名された。第2因子は5項目が全て“他者への関心”を反映した項目で構成されていたため“他者への関心”因子と命名された(表1)。

表1 共同体感覚認知尺度の因子分析結果：
回転後の因子負荷量(最尤法・プロマックス回転)

項目番号	下位尺度と項目	因子1	因子2
因子1 貢献への決心			
13	周りの人が楽しくなるようなことをしよう。	.92	-.14
16	周りの人が明るい気持ちになるようなことをしよう。	.88	-.02
12	周りの人を元気にするようなことをしよう。	.76	.04
20	周りの人の気持ちが良くなるようなことをしよう。	.73	.12
19	周りの人が喜んでくれるようなことをしよう。	.70	.12
因子2 他者への関心			
10	周りの人の役に立てるようなことは何だろうか。	.01	.82
8	周りの人のためになるようなことは何だろうか。	.01	.76
4	周りの人の手助けができるようなことはないだろうか。	-.07	.75
9	周りの人に協力できるようなことは何だろうか。	.09	.70
5	周りの人がして欲しいようなことは何だろうか。	.01	.66
因子間相関		因子1	因子2
		因子1	— .57
		因子2	—

N=140

信頼性 共同体感覚認知尺度の各下位尺度の内的一貫性を検討するためにCronbachの α 係数を算出した。その結果“貢献への決心”は.91, “他者への関心”は.86であった(表2)。

妥当性 はじめに共同体感覚認知尺度の構成概念妥当性を検証するために共同体感覚認知尺度の下位尺度得点と青年版共同体感覚尺度の下位尺度得点の相関係数を算出した。その結果“貢献への決心”得点は“所属感・信頼感”得点と有意な正の相関($r=.42, p<.05$)を示した。また“貢献感”得点と有意な正の相関を示した($r=.35, p<.05$)。しかし“自己受容”得点とは有意な相関を示さなかった($r=.15, ns$)。

次に“他者への関心”得点は“所属感・信頼感”得点と有意な正の相関($r=.31, p<.05$)を示した。また“貢献感”得点と有意な正の相関を示した($r=.28, p<.05$)。しかし“自己受容”得点とは有意な相関を示さなかった($r=.00, ns$) (表2)。

次に共同体認知尺度の基準関連妥当性を検証するために共同体感覚認知尺度の下位尺度得点と主観的幸福感尺度得点の相関係数を算出した。その結果“貢献への決心”得点と主観的幸福感尺度得点とは有意な相関を示した($r=.27, p<.05$)。しかし“他者への関心”と主観的幸福感尺度得点とは有意な相関を示さなかった($r=.08, ns$) (表2)。

さらに共同体認知尺度の基準関連妥当性を検証するために共同体感覚認知尺度の下位尺度得点と肯定的気分尺度得点の相関係数を算出した。その結果“貢献への決心”得点と肯定的気分尺度得点とは有意な相関を示した($r=.27, p<.05$)。しかし“他者への関心”と肯定的気分尺度得点とは有意な相関を示さなかった($r=.15, ns$) (表2)。

よって本研究の仮説1: 共同体感覚認知は青年版共同体感覚と正の関連を示す, 仮説2: 共同体感覚認知は主観的幸福感と正の関連を示す, 仮説3: 共同体感覚認知は肯定的気分と正の関連を示す, は概ね支持された。

表2 共同体感覚認知尺度と各尺度の平均値, 標準偏差, α 係数および相関係数

尺度	平均	標準偏差	α	相関係数						
				1	2	3	4	5	6	7
1 貢献への決心	13.84	3.79	.91	—	.53 *	.42 *	.15	.35 *	.27 *	.27 *
2 他者への関心	13.56	3.17	.86		—	.31 *	.00	.28 *	.08	.15
3 信頼感	36.09	7.09	.89			—	.39 *	.60 *	.51 *	.43 *
4 自己受容	18.65	5.13	.88				—	.48 *	.66 *	.27 *
5 貢献感	20.11	4.67	.90					—	.39 *	.14
6 主観的幸福感	18.66	3.89	.77						—	.40 *
7 肯定的気分	15.08	4.10	.93							—

$N=140$, * $P < .05$.

考察

本研究の目的は共同体感覚の認知的側面を測定する共同体認知尺度を作成することであっ

た。因子分析を行った結果、想定通りの因子が抽出された。また下位尺度の信頼性係数は十分な値であった。また青年版共同体感覚尺度得点との相関係数も“自己受容”尺度以外は十分な値であった。さらに主観的幸福感尺度得点と肯定的気分尺度得点の相関係数は“貢献への決心”に関しては十分な値であった。この結果から仮説は概ね支持され共同体感覚認知尺度は十分な信頼性と一定の妥当性を有することが示された。

まず共同体感覚認知の“貢献への決心”の側面と他の指標との関連について考察する。“貢献への決心”であるが、青年版共同体感覚との関連では“自己受容”以外の全ての指標と正の関連を示した。“貢献への決心”と関連しなかった“自己受容”に関しては、橋口（2012）が妥当性に関して疑問を呈している。橋口（2012）では詳細な検討はなされていないが、“自己受容”は他者との関連を考慮に入れていない概念であり、他者との関係を考慮する共同体感覚の概念とは別の概念である可能性がある。また“自己受容”が共同体感覚の条件であれば、臨床において自己受容していないクライアントが来談した場合、“自己受容”しないと共同体感覚的な考え方や行動を採ることができないということになる。こういった点を考慮すると共同体感覚の育成が困難になると考えられる。その意味でも共同体感覚の条件から“自己受容”は除外して考える方が臨床的にも有用であると考えられる。一方で“貢献への決心”は主観的幸福感や肯定的気分と正の関連を示した。このことは共同体感覚は精神的健康のバロメーターである（岩井、2011）とする指摘を裏付ける結果であった。

次に共同体感覚認知の“他者への関心”の側面と他の指標との関連について考察する。青年版共同体感覚との関連においては“貢献への決心”同様に、“所属感・信頼感”と“貢献感”とは正の関連が示されたが、“自己受容”との関連が示されなかった。この点に関しては、“貢献への決心”で考察したことが同様に当てはまるだろう。この結果からも“自己受容”を共同体感覚の条件に含めるかどうかは再考の余地があると考えられる。ただ“他者への関心”は“貢献への決心”と異なり、主観的幸福感とも肯定的気分とも関連が示されなかった。“他者への関心”は、Gemeinschaftsgefühl の英訳である Social Interest の邦訳に相当する。その意味では共同体感覚の中核をなすはずのものである。ではなぜ“他者への関心”が主観的幸福感や肯定的気分と関連しなかったのであろうか。おそらく、“他者への関心”は必要条件ではあるが十分条件ではないのではないだろうか。加藤（2012）は、まず他者へ関心を持ち、次に他者に貢献しようと考えることが幸せになるために大切であると指摘している。またAdler自身は鬱病の患者に「こう考えると2週間で良くなると思いますよ。どうやったら人を喜ばせられるかな、と毎日考えてみるんです」と助言しているが（Adler, 1931）、人を喜ばせるプロセスには、その人の関心に目を向け、そして貢献するというプロセスが潜在している可能性がある。加藤（2012）とAdler（1927）の指摘を踏まえると、“他者への関心”（必要条件）と“貢献への決心”（十分条件）には“他者への関心”から“貢献への決心”へ進み幸福へと繋がるという潜在的なプロセスモデルがあり、そのために“他者への関心”は必要条件に留まり、“他者への関心”は主観的幸福感や肯定的気分と関連しなかったのかもしれない。

本研究の限界と今後の課題であるが、項目作成のさい項目プール数が少なかったことに加え

て、第1因子は「～なことをしよう」で終わり、第2因子は「～は何だろうか」で終わっているため、因子のまとまりは、内容の類似性ではなく、語尾の類似性でまとまっている可能性があり、内容的に共同体感覚認知の一側面しか測定できていない可能性がある。今後は項目プールを増やした上で語尾を多様化した項目を作成し再検討する必要がある。また「感覚」と「認知」も「受け取ったもの」という点では同一となっており「共同体感覚認知」という表現が重複している上に、内容が「意欲」や「関心」を訊いている表現になっている。共同体感覚と「意欲」や「関心」の区別が不明確になっている可能性がある。今後は「感覚」と「認知」を区別できるような項目を作成した上で再検討する必要がある。また標本数が140ということで探索的因子分析に耐えるほどの標本数ではあるものの、結果的に得た因子構造が本研究の標本のみにあてはまる可能性は残されている。そのため他の標本にも同様の因子構造が再現できるかどうかはわからない。今後は他の標本でも同様の因子構造が再現できるかどうか構造方程式モデリングで確認的因子分析を行い適合度を検証し交差妥当性を確認する必要がある。また“他者への関心”と“貢献への決心”そして適応指標には共同体感覚のプロセスモデルが潜在している可能性があるが本研究では検証できていない。今後は“他者への関心”を独立変数、“貢献への決心”を媒介変数、適応指標を従属変数とした共同体感覚の認知プロセスモデルを検証する必要がある。

【文献】

- Adler, A. (1927). *Menschenkenntnis*. Frankfurt : Fischer Taschenbush-Verlag.
 (高尾利数 (訳) (1987) 人間知の心理学 春秋社)
- Adler, A. (1931). *What Life Should Mean to You*. Boston : Little, Brown & Company.
- 会沢信彦 (2009) 教育相談の“ゴール” 共同体感覚をはぐくむ. 千葉教育, 580, 32-33.
- Ansbacher, H. L. (1968). The concept of social interest. *Journal of Individual Psychology*, 24(2), 131-249.
- Ansbacher, H. L., & Ansbacher, R.R. (1956). *The individual psychology of Alfred Adler : A systematic presentation in selections from his writings*. New York : Basic Books.
- Crandall, J. E. (1975). A scale for social interest. *Journal of Individual Psychology*, 31(2), 187-195.
- 深沢孝之 (2015). 認知論. 鈴木義也・八巻秀・深沢孝之 アドラー臨床心理学入門 (pp. 56-63) アルテ
- 福井 至 (2002). 抑うつと不安の関係を説明する認知行動モデル 風間書房
- Greever, K. B., Tseng, M. S., & Friedland, B. U. (1973). Development of the social interest index. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 41(3), 454-458.
- 橋口誠志郎 (2012). 小学校 (中・高学年) 用共同体感覚尺度作成の試み - 中核信念に焦点をあてて - 学校メンタルヘルス, 15 (2), 286-291.
- 服部弘子・向後千春 (2012). 成人版共同体感覚尺度作成のための予備的研究 日本教育心理学会総会発表論文集, 54, 533.
- 岩井俊憲 (2011). 勇気づけの心理学 増補・改訂版 金子書房
- 加藤諦三 (2012). 眠れない人のための心理学 PHP 研究所
- 小堀修・丹野義彦 (2004). 完全主義の認知を多次元で測定する尺度作成の試み. パーソナリティ研究, 13 (1), 34-43.
- 向後千春 (2014). アドラー “実践” 講義 幸せに生きる 技術評論社
- 向後千春 (2015). アドラー心理学のこれまでとこれから 第5回日本臨床・教育アドラー心理学研究

会 配布資料

- 高坂康雅 (2011). 共同体感覚尺度の作成. 教育心理学研究, 59 (1), 88-99.
- 松尾太加志・中村知靖 (2002). 誰も教えてくれなかった因子分析—数式が絶対に出てこない因子分析入門— 北大路書房
- 野田俊作 (1987). オルタナティブ・ウェイーサイコセラピーとアドラー心理学— アニマ2001
- 野田俊作 (2005). カウンセリングのデザイン. アドレリアン, 19 (1), 1-13.
- Seligman, M. (2011). *Flourish: A visionary new understanding of happiness and well-being*. New York: Atria.
- (宇野カオリ (監訳) (2014). ポジティブ心理学の挑戦—“幸福”から“持続的幸福”へ— ディスカバー・トゥエンティワン)
- 繁榊算男・柳井春夫・森 敏明 (1999). Q&Aで知る 統計データ解析—Dos and DON'Ts— サイエンス社
- 島井哲志・大竹恵子・宇津木成介・池見 陽 (2004). 日本版主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale: SHS) の信頼性と妥当性の検討. 日本公衆衛生雑誌, 51 (10), 845-853.
- Sulliman, J. R. (1973) The development of a scale for the measurement of “social interest “. *Dissertation Abstracts International*, 34, 2914.
- 八巻 秀 (2015). 共同体感覚. 鈴木義也・八巻秀・深沢孝之 アドラー臨床心理学入門 111-116. アルテ

謝辞

貴重な時間を割き本研究にご協力頂いた先生方そして学生の皆さんに深謝致します。